

## 『富士山タイムトライアル』

曾我部成一

「大学生になったらサイクリングをやりたい！」高校の頃から私はこう思い続けてきた。体操部に所属していた為、夏休み等長期に渡る休暇も合宿や練習に追われ好きな旅行にも出られず。そんな事から、クラブ活動即旅につながるサイクリングに憧れを抱いたのがもしれない。

さて、念願がたつてサイクリング部に入部してから、早くも三年が過ぎようとしている。この間、春合宿二回、夏合宿三回、新歓ラン、フリーランなど数多くのランを経験してきた。北は北海道から南は四国まで、色々な土地を訪れる事ができ満足している。しかし、何と云っても富士山タイムトライアルが一番印象に残っている。このタイムトライアル、私が一年の時と第一回が行われた。初めてこの話を聞いた時は少々驚いた。なにしろ日本一の山、自転車で登る事など考えた事もない。不安な気持ちで当日を迎えた。富士スバルラインの予備知識はゼロ、とにかく全力を出せば……という気持ちでスタート！ それ程傾斜している様に見えるのに足が重い。息が焦ってしまい必要以上に力を入れてしまう。一合目を過ぎたあたりからはインナー&ロー。とにかく苦しかった。途中に数箇所駐車場がある。丁度紅葉の盛りで景色も最高、おまけに焼きいかの匂いがしてきたりして……ところが先を走っている連中、誰も休んでいない。泣く〜重いペダル

を踏みしめゴールへ向かったのを覚えている。

第二回のタイムトライアルは、学外から参加者を募るオープン形式であった。コースの状況も大体つかみ、体調も良かったのであるが、自己最高のタイムが出せた。ただ、第一回の失敗から慎重になり過ぎ、前半のスピードをセーブし過ぎた。今考えると二時間の壁を破れた可能性があっただけに非常に悔やまれる。

今年の春には、専修大学主催のタイムトライアルに出してみた。この日、下界は薄日の射すます〜の天気であったが、四合目あたりから風が強くなり前に進まなくなる。こんなコンディションなら、他の連中の記録より大した事無いだろうと思っただけが……一時間三十八分という、信じ難い記録が出ていた。世の中広い！と痛切に感じた。

そして今年十月二日、第三回（私にとっては四回目）のタイムトライアルに挑んだ。試験直後でありトレーニングは皆無に等しい。当然の如く記録は四回の内最後、しかし今回は他にも目的があったので記録は二つ。その目的とは……「富士山の頂上に立つ！」……である。五合目まで登りながら即リターン、では余りに勿体ない。そんな故で仲間を募ったのである。元ワンゲルの永見氏、カマカセの鈴木氏、ユニークな登山服で定評のある上原氏の同意を得た。

四人共、記録はバツとしながら走り切ったという満足感と日本一の山へチャレンジするという興奮で、何か英雄的な気分

浸っていた。夕陽を見ながら頼張ったアメリカントックのうまがった事。他では味わえないものだった。

翌朝六時出発。初、鼻から道を間違えてしまい少々慌てた。六合目を過ぎたあたりから本格的な登りが始まる。赤茶けた火山灰におおわれた富士山、草木は全く見られなくなった。後ろを振り返ると山中湖が地図に描かれているのと同じ形さして見える。山小屋がある度に休んだ。次の山小屋は目の前に見えているのだがいざ登ってみると中々近づいてくれない。息がはずぬ。高山病なのだろうか、頭が痛い。八合目を過ぎてからは半は放心状態で登った。八合目の半目を過ぎてからの長かった事、そして又、九合目を見落とし頂上に着いてしまった時のあっけなさといいたら良かった。天気が良かったせりが頂上は思った程寒くなかった。測候所まバックに記念撮影。火口を一周する途中、石を並べて「千エ丈」と書いてあるのを見付けた。我々はさっそく「東エ丈CC」に改めた。(まさか、天下の「朝日新聞」に載るうとは思わなかった) 測候所に有る展望台から見る景色は素晴らしい。右から八ヶ岳、南アルプスを経て駿河湾、更に伊豆半島と続いている。「俺は今、日本で一番高い所に居るんだ！」との満足感で一杯だった。最後の富士山タイムトライアルを飾るにふさわしい登頂であった。